

金沢謙太郎著

『熱帯雨林のポリティカル・
エコロジー——先住民・資源・
グローバルイゼーション——』

昭和堂 2012年 vii+278ページ

内藤 大輔

I

熱帯林の減少問題が紙面を飾らなくなって久しい。1980年代には、東南アジアにおける熱帯林の商業伐採は急増し、マレーシア・サラワク州（以下、サラワク）では、商業伐採によって生活の場を脅かされた狩猟採集民ブナンによる伐採への抗議が行われ、世界的な注目を集めた。しかし、30年以上たった今も、サラワクでは商業伐採をめぐる対立の抜本的な解決をみないまま、断続的にブナンによる林道封鎖が続いている。「なぜブナンの抗議活動が続いているのか」、それが本書の主題である。

本書が採用している研究アプローチである「ポリティカル・エコロジー」は、「人間による資源利用の政治経済的側面に焦点をあて、マイクロないしはグローバルな政治経済システムとの関係にまで視野を拡大」（17ページ）しようというものである。サラワクの熱帯林に暮らしてきた狩猟採集民ブナンを取り巻く状況は、資源利用をめぐる多くの利害関係者が絡み合い、ポリティカル・エコロジーが扱う典型事例ともいえる研究テーマのひとつである。

本書は、著者が東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻に提出した博士論文を加筆・修正したものである。サラワク州政府は、熱帯林問題に関わっていた海外の活動家のサラワクへの入国（入境）を禁じ、国内の活動家、弁護士などの活動を制限してきた。もちろん研究者に対しても同様であり、常に調査に制限がかかりうる状況下で、粘り強く積み重ねられた15年にわたる綿密なフィールドワークを経て書き上げられた貴重な一冊である。

II

本書の構成は以下である。

序章では、本書の目的を述べている。草の根の環境保護運動の象徴的存在として世界的に知られるようになった林道封鎖行動によってブナンが何を得たのか、なぜ抗議活動が現在も続いているのかを問い、近年、サラワク州政府がブナンに対し実施している定住化に向けたさまざまな施策（以下、「公共サービス」）によって、彼らの生業形態がいかに変容し、周辺の生態環境へ影響をもたらしたのかを分析するとしている。

第1章では、ポリティカル・エコロジーの先行研究をレビューし、本書における研究枠組みを提示している。ポリティカル・エコロジーは、土壌浸食や森林劣化というマイクロな環境変化をマクロな政治経済的作用として位置づけるアプローチであるとし、人文地理学、文化人類学、社会学などの複数の社会科学分野にまたがるハイブリッドな学問であり、地域レベルの生態学的問題を重視しつつ、研究対象の地域を取り巻く経済社会状況にも注意を払うことを求めているとしている。

本書における研究枠組みとして、著者はBryant [1991] によるポリティカル・エコロジー論の3つの分析フレーム、(1)環境変化への原因、コンテキスト、(2)環境資源へのアクセスをめぐるコンフリクト、(3)環境変化がもたらす社会経済的变化、に従って解析を進めている。これに加えて、戸田 [1994] が指摘している環境破壊の時系列の連環性を考慮に入れ、サラワク州政府の実施しているブナンへの「公共サービス」施策の導入を新たなステージへの移行として捉えることで、動態的視点を導入している。

第2章では、まずブナンの生活様式について、遊動型、半定住型、定住型などの居住形態による分析を行い、ブナンの生業である、狩猟、主要な食料源のサゴ採集、貴重な現金収入源の沈香採集方法や交易の歴史、流通経路について詳述している。次に焼畑農耕民の焼畑などの生業についても概説し、ブナンは森林からの資源のみに依存し、単独で暮らしてきたわけではなく、「タム」（市場）などを介し、近隣の焼畑農耕民との交易を通じて、狩猟採集に特化

した生活戦略を採用するにいたったのではないかというブナン像について論じている。

第3章では、地域の自然や社会が内包する本質的な複雑さを一元的、画一的に管理、制御する傾向やその過程を指す、Scott [1998] による「読みやすさ」(Legibility) という概念を援用し、サラワクにおいて本来多様なアクターが重層的に利用してきた熱帯林が、国家に利益をもたらす「資源」として、単純な木材生産の場、そしてアブラヤシ園へと改変されていく過程が描かれている。植民地制度を基礎として、サラワクの政治家が権力者の家族や友人らを中核としたパトロンクライアント関係を構築していく歴史的な経緯について述べている。

第4章では、サラワクの森林伐採をめぐる企業、NGO、国際機関の各アクターの行動原理や利害関係について分析している。サラワクの華人系企業が伐採権をもつ政治家と森林利権をめぐる強固なネットワークを築く過程を、リンブナン・ヒジャウ社など代表的な木材会社3社を事例として取り上げている。また先住民の権利について取り組む国内外のNGOの動向も概観している。国際熱帯木材機関(ITTO)の役割や森林認証制度の問題点など、国際機関による熱帯林問題に関する施策の有効性について疑問を投げかけている。

第5章では、サラワク州政府がブナンに対し「公共サービス」施策を導入するにいたった意思決定過程に焦点を当てている。ブナンをめぐる問題が国際化した1980年代後半には、文化人類学者などから長年ブナンが暮らしてきた地域を「生物圏保存地域」(Biosphere Reserves) とし商業伐採の回避を求め具体的な政策提言がなされたものの、結果的にはエリートの木材利権を優先し、伐採された。サラワク州政府は「伐採効率の極大化」のために、ブナンを定住化させ「公共サービス」を導入する意思決定をまず行い、後にブナンの「発展」、「進歩」、「近代化」のためという名目を付け加えてきたことを著者は解き明かしている。

第6章では、「公共サービス」導入に伴うブナンの生活変容と生態環境への影響について、バラム河の上流域、中上流域、中流域の3地域から「公共サービス」が入っている村と入っていない村の計6村を比較し、村の歴史、世帯調査、野生可食果樹種を指標とする比較調査を行っている。調査の結果か

ら、「公共サービス」によりブナンの定住人口が増え、粗放な焼畑を拡大したことで、村落周辺の森林資源への利用圧が高まり、野生可食果樹種が減少傾向にあることを示唆し、森林生態系に影響が及んでいることを明示している。

次に、30を超えるブナン集落の代表者が集まり取りまとめたという「2002年ロング・サヤン宣言」をもとに、ブナンが直面している食糧難、収入不足、劣悪な住居事情といった問題や、商業伐採の停止と先住慣習権の認知、公共サービスの改善といったサラワク州政府に向けた要求について詳述している。

終章ではポリティカル・エコロジー論の3つのフレームワーク分析と、ステージ連環分析を組み合わせた研究手法の有効性について検討している。著者は第1ステージを1900～90年代、第2ステージを90年代以降と設定し、環境変化のコンテキスト、アクター間のコンフリクト、社会経済変化ごとに分析している。第1ステージでは、森林資源の囲い込みがなされ、第2ステージでは、サラワク州政府による公共サービスが導入された。定住化政策の導入はブナン人口の増加や焼畑の拡大を引き起こし、周辺の森林環境への負荷を強めていることから、ブナンが新たな変化に適応できていないと結論づけている。サラワク州政府とブナンの間のコンフリクトの解決には、信頼関係の形成が必要条件であるとし、そのためには森林から得る財とサービスの評価の見直しが必要であり、多様な森林利用と先住民に森林管理を委ねるべきだと結んでいる。

以上が本書の概要である。

III

本書は、ブナンが30年以上にわたり商業伐採への抗議活動を続けている理由として、サラワクのエリートが植民地期の土地・森林制度を引き継ぎ、綿密に築かれたパトロンクライアント関係を基盤として、長期政権を敷いている州首相のもと木材利権が維持され続けているためだとしている。そのなかでブナンに対する「開発」という大義名分は伐採を正当化するために考え出されたという政策決定プロセスを鋭く描き出している。

そして著者は、冒頭から日本の援助機関が商社に供与した林道建設融資について取り上げ、サラワク

での森林伐採をめぐる問題に日本が当事者として関与することの重要性を改めて説いている。また木材資源をめぐるアクター分析をマレーシア一国にとどまらず、パプアニューギニアやアフリカまで広げている点も、本書の特色のひとつであろう。マレーシアでは依然としてメディアへの厳しい検閲が敷かれており、木材利権をめぐる実情に関する情報が収集しにくい。Malaysia Kini, Sarawak Reportなどのオルタナティブ・メディアやNGOの情報から、表には出てきにくいブナンの直面する緊迫した現況を伝えている。

しかし、ここで、いくつか感じた点を指摘しておきたい。著者は本書を通じて長く熱帯林で暮らしてきたブナンの先住慣習権が侵害されてきた過程をさまざまな角度から描き出している。一方で、第6章では1990年代からサラワク州政府による公共サービスの導入によって、ブナンの粗放な焼畑によって森林環境の悪化を招いている状況を詳細な世帯調査や植生調査から示している。著者がこれまで論じてきたように、ブナンの慣習的に利用してきた広大な森林は、サラワク州政府によって囲い込まれ、伐採されてきたという背景がある。そのため定住後のブナン村落周辺の森林に限定して、その「持続性」を問うのは少し難しいのではないだろうか。これらの議論は注意しなければ、意図せぬ形で、長年にわたり焼畑民が熱帯林の「破壊者」とされてきたのと同じように、今度はブナンが熱帯林の「破壊者」として扱われてしまう可能もある。

次に、水稲耕作民や焼畑民に比べて、狩猟採集民であるブナンの生業は「読みにくい」(Illegible)ということを改めて感じた。それは国家に対しても、研究者に対しても同様に働く。インタビューは基本的には調査時に村にいた人が対象とされるため、村に定住せず遊動している人への調査は難しい。たとえば世帯調査において、ブナンの収入に関する調査も行われているが、公務員など定期的な賃金労働に就いている場合はある程度給料が特定できるが、沈香など狩猟採集からの得ている収入はとても「読みにくい」。数年に1回でも高品質の沈香が見つければ、その収入は高額になる。サラワク州政府にとっても、研究者にとってもブナンの収入を正確に把握することは難しいだろう。ブナンは沈香採集のために、インドネシア国境付近まで入っている

という。ボルネオの森に長く暮らしてきた狩猟採集民の知識を最大限に生かした生存戦略のひとつであろう。ブナンはまさにスコット [2013] で描かれている国家に抗ってきた民でもあり、そのような視点からの詳述も欲しかった。

終章で著者はこれらの問題の解決には、サラワク州政府としてブナンの要求を知ることが重要だと指摘している。たしかにそのとおりではあるが、サラワク州政府は人類学者らによる保護区設置提案を受け入れず、伐採許可を出したことからわかるように、ブナンの要求を熟知したうえで、定住政策を継続してきたのではないだろうか。現州首相による長期政権が続き、パトロンクライアント関係による社会構造が維持されている以上、ブナンが直面する構造的な問題は変わらない。サラワク州政府がブナンの先住慣習権を認めない、という根本的な問題が未解決である限り、コンフリクトは続くだろう。現在サラワク各地で進行中であるダム建設に際しブナンが立ち退きを迫られており、抗議活動に参加していた住民が逮捕されたという一報が入った。依然として解決への道のりは遠い。

サラワク州政府は、焼畑をせず遊動して暮らしてきたブナンには先住慣習権を認めてこなかったが、隣接して暮らす焼畑農耕民に対してはある程度先住慣習権を認めてきた。サラワク州政府は同じ領域に先住慣習権を主張する民族間対立を巧みに利用し、サラワク全土の市民運動に波及することを防いだきたともいえる。しかし、昨今のアブラヤシ園やアカシア林の急激な拡大は、これまである程度保障されていた焼畑耕作民の先住慣習権をも脅かしており、民族を超えた連携が進む契機となってきている。実際、マレーシア弁護士会 (Malaysian Bar Council)、マレーシア人権委員会 (SUHAKAM) による先住民の土地権調査、マレーシアの先住民ネットワーク (JOAS) の結成など、半島部、サバ州との先住民運動の連帯も進み、また国際的には、先住民族の権利に関する国際連合宣言 (UNDRIP) が採択されるなど変化の兆しも見えてくる。

終わりに、資源をめぐる政治経済的な利害関係を明らかにする際、ポリティカル・エコロジーは効果的であることを強調しておきたい。このアプローチはマレーシアだけではなく、もちろん日本においても有効である。とくに本書の冒頭でも指摘されてい

るように3.11はドーヴェルニュのいう「シャドウ・エコロジー」(ii ページ)が噴き出したイベントではなかっただろうか。また誰もがその問題性を認識していても、特定の資源をめぐる巨額のレントが生じるため、解決が難しいという共通の課題がみえてくる。あらためてこの研究領域の重要性が認識され、新たな視点でもう一度熱帯の資源問題について捉え直す契機になることを期待したい。

以上、本書は熱帯林の資源問題を理解する際のポリティカル・エコロジーのアプローチの有効性を示した重要な貢献である。今後ポリティカル・エコロジー研究を志す者にとっての必読書のひとつとなるだろう。

文献リスト

<日本語文献>

- スコット, ジェームス・C 2013.『ゾミア——脱国家の世界史——』佐藤仁監訳 みすず書房.
戸田清 1994.『環境的公正を求めて——環境破壊の構造とエリート主義——』新曜社.

<英語文献>

- Bryant, Raymond L. 1991. "Putting Politics First: The Political Ecology of Sustainable Development." *Global Ecology and Biogeography Letters* 1 (6): 164-166.
Scott, James C. 1998. *Seeing Like a State: How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed*. Yale University Press.

(総合地球環境研究所特任助教)